

観光による 広域連携を考える

～「どうなん・追分シーニックバイウェイ」から探る地域間連携～

どうなん・追分
シーニック
バイウェイルート



広域連携が進んでいる分野の一つが観光です。その中で、近隣市町村が連携するためのインフラである“みち”に着目した取り組みが「シーニックバイウェイ北海道」です。ここでは「シーニックバイウェイ北海道」の指定13ルートの中から、「どうなん・追分シーニックバイウェイルート」が2017年9月に行ったフットパス・ロードと歴史の道掘り起こし資源調査に同行し、観光における広域連携について考えてみました。

シーニックバイウェイとは

「シーニックバイウェイ」はシーニック（風景の形容詞）とバイウェイ（わき道・寄り道）を合わせた言葉です。シーニックバイウェイは米国で1990年代に導入されたもので、道路そのものが観光資源になり得ることに着目し、沿道の景観や歴史、文化、自然、レクリエーションなどの地域資源が傑出した道路を公的に認定し、それらの価値を積極的に保全・活用する施策です。

「シーニックバイウェイ北海道」は、この米国での取り組みを参考に、地域に暮らす人が主体となって、企業や行政が連携し、美しい景観づくりや個性的で活力ある地域づくり、魅力ある観光空間づくりを目指す取り組みとして2005年にスタートしました。2018年2月末で13の指定ルート、1つの候補ルートがあり、道内各地で約400団体が活動をしています。

「シーニックバイウェイ北海道推進協議会」が制度の運営を担っており、各種の審議や支援などを行っています。また、シーニックバイウェイの理念の浸透や広報

活動を担うために（一社）シーニックバイウェイ支援センター（以下、支援センター）が指定され、地域・企業・行政の連携を図っています。シーニックバイウェイ北海道では、各ルートに「ルートコーディネーター」としてルート運営・活動をサポートする人材を配置しています。

また、指定ルートになると、活動エリアを管轄する行政団体や機関によって構成される「ルート運営行政連絡会議」が設置され、ルートからの協力要請に対する支援や調整が行われます。

どうなん・追分シーニックバイウェイルート

2008年に候補ルートになり、2015年12月に指定ルートになったのが「どうなん・追分シーニックバイウェイルート」です。エリアは木古内町・知内町・福島町・松前町・上ノ国町・江差町・乙部町・厚沢部町、離島の奥尻町の9つのまちにまたがり、各町の商工会や観光協会など29団体で構成されています。このルートはエリア内に市がなく、9つのまちの力を結集した活動が欠かせないルートといえます。また、2014年に日本創生会議が公表した若年女性人口変化率（2010年を基準にした2040年の20～39歳女性の人口変化率）では、いずれのまちも若年女性人口が5割以下に減少することが推計されており、高齢化・少子化が進んでいるという厳しい地域でもあります。

一方で、2016年3月の北海道新幹線開業、北海道唯一の城下町を持つ松前町や歴史的な街並み景観を生かしたまちづくりが盛んな江差町など、独自の観光資源を有するまちもあります。北海道の中でも独特の

歴史と文化を有し、こうした観光資源の存在は外国人客に訴求力がある地域として期待されています。

そこで、どうなん・追分シーニックバイウエイルートでは、地域づくり、景観づくり、観光空間づくりの3つの取り組みの柱のもと、「歴史の道掘り起こし」、「ビューポイントパワーアップ」、「どうなんシーニック de ナイト」、「どうなんフットパス・ロード」、「どうなんの食・北のどんぶり」、「教育体験旅行呼び込み」、「おもてなしガイド」の7つのプロジェクトを推進しています。

フットパス・ロードと歴史の道掘り起こし資源調査

2017年9月13～15日、どうなん・追分シーニックバイウエイルートでは、推進中のプロジェクト活動の一環として、これからの新しい魅力を引き出すための「どうなんフットパス・ロードおよび歴史の道掘り起こし資源調査」を行いました。調査は、ルートコーディネーターの佐藤好子さんをはじめ、ルート事務局スタッフや理事など構成団体のメンバーが実施しました。2泊3日の調査では、木古内町、知内町、福島町、松前町、上ノ国町、江差町の6町を訪問し、地元ガイドから説明を受けながら、実際にルートを歩いて観光資源としての可能性を調査しました。

木古内町では、木古内町観光協会の藤谷晃章事務局長らがガイド役を務め、芝桜の名所として知られ、明治元年に旧幕府軍が砲台や壕を築いたという薬師山

に登って木古内町の眺めを楽しみました。また、「寒中みそぎ祭り」が開催されるみそぎ浜を見学し、祭り期間外の体験メニューの取り組みなどについて紹介がありました。



みそぎ浜で解説する藤谷さん（左端）

1泊目は道内最古といわれる知内町の知内温泉に宿泊。翌朝から地元学芸員の案内で、道内最古の雷公神社、「乳母杉（姥杉）」と呼ばれるご神体がある姥杉神社などを見学しました。乳母杉は、古くから母乳が出るようにと祈りを捧げられている女性の守り神で、姥杉神社では毎年1月に男子禁制の「十七夜講」という祭りが行われているそうです。

その後、福島町に移動し、千軒地区で春と秋に開催している「殿様街道探訪ウォーク」を再現した散策



殿様街道ウォークを再現し、歴史解説をする中塚さん

を楽しみました。「殿様街道探訪ウォーク」で案内役を務めている中塚徹朗さんがイベントと同様に殿様の姿に扮し、歴史解説を交えた地域の魅力を披露して、参加者から好評を博していました。また、地域の名産となった「千軒そば」の生産地を見学。毎年夏に開催されている「千軒そばの花の観賞会」の説明を聞きながら、

観賞会でそば畑を舞台に奉納される松前神楽のイメージを膨らませました。

桜の名所で知られる松前町では、藩政時代の松前を再現した「松前藩屋敷」を訪問しました。人気ガイドの飯田幸仁さんが時代劇の装束でガイド役を務め、当時の暮らしぶりを解説したほか、道の駅「北前船松前」で津軽海峡の眺めを堪能しました。

最終日に訪問した上ノ国町では、海の神が山の女神に会いにいったと言われている「神の道」を散策。その後、武田信廣が15世紀後半に築いた山城跡の「勝山館跡」まで散策ルートを登りました。上ノ国町観光協会の加藤愛美さんがガイド役を務め、まちに伝わる伝説などを交えて上ノ国町の魅力を紹介しました。

最後の訪問地となった江差町では、江差町歴まち商店街協同組合監事を務める室谷元男さんの案内で、檜山道立自然公園の特別区域に指定されている「かもめ島」を散策しました。その後、問屋や蔵、商家、町屋、社寺などの歴史的建造物や史跡などを保存・再現・修復保全し、歴史の香りが漂う街並みが整備された「いにしえ街道」を歩き、街道沿いに住み商いをしている人たちの声を聞きながら、まちの魅力を肌で感じていました。

江差町の散策を楽しんだ後、調査を終えたルートメンバーと意見交換を行いました。そこでは「近隣なのに知らなかった観光資源、特に歴史資源があることに驚いた」という声があり、近くに住んでいても意外と知られていない観光資源が眠っていること、それを発見できたという一つの成果が認識されました。観光における地域間連携の第一歩は、お互いのまちのを知ることです。それぞれのまちにどんな観光資源があるのかを違った立場の人たちの視点で評価することで、新しい発見や連携の芽を見つけることができるでしょう。

また、そうした観光資源の要素を「地元の人たちが共有すること、意識すること、誇りを感じる事が重要」という声もありました。「いろいろな人と知り合うことが人づくりにつながっていく。広域的に学習していくことで、多くの人たちに伝えることにもなる」と、連携しながら学び合う姿勢や情報発信の重要性への意見が挙げられました。



調査を終えての意見交換会

観光による広域連携を発展させるために

「どうなんフットパス・ロードおよび歴史の道掘り起こし資源調査」に同行した経験から、これからの観光における広域観光について考えてみました。

観光広域連携を進めていく上で大切なことは、広域交通ネットワークの拠点をどこにするかを明確にしておくことです。それぞれが勝手に拠点だと主張すれば観光客にとっては移動しづらい不便な地域になってしまいます。どうなん・追分シーニックバイウエイルートには、すでに観光地として知られている松前町や江差追分全国大会などで全国から訪問者がある江差町があります。しかし、現実の広域交通の動きをみると、北海道新幹線の開業効果をうまく受け止めている木古内町を核にネットワークを形成していくことが有効だと思われます。すでに、二次交通の拠点としての機能も生まれてきており、他の地域は、それを有効に活用していく戦略を考えていくことで広域連携が進むでしょう。全体の拠点をどこにおくのかを、地域のみならず全体で共有していくことが大切です。

どうなん・追分シーニックバイウエイルートに限ったことではありませんが、本来、それぞれのまちには個性があります。個性が強ければ強いほど、相互のつながりを深めていくためには強力な調整力が必要です。また、各地で実践的に活動しているリーダーたちのつながりや団結力を増していく仕掛けも必要です。シーニックバイウエイでは、その役割をルートコーディネーターが担っていますが、このコーディネーターの力量が観光における広域連携の重要な鍵といえるでしょう。調査では限られた時間の中で、効率的に各地を訪問する準備を進めてきたルートコーディネーターの佐藤さんの調整力が大きな力になりました。広域連携におけるコーディネーターの存在は欠かせません。シーニックバイウエイに限らず、観光の広域連携を進める中では、

すべての関係者が集まって協議できる機会はそう多くはないように思います。実践的で真に実のある連携をするためには、それぞれのまちに精通していこうというコーディネーターの努力と、地域の人たちとの地道なコミュニケーションづくりが必要で、地域間連携の成果を左右する大きな要素といえるでしょう。

また、このルートには福島町の殿様街道、松前藩の歴史など、ゆかりの人物の足跡を紐解きながら展開できるヒストリカル（歴史探訪）ツアーの可能性がります。アカデミックな関心をそそるコンテンツといえ、要求水準の高い富裕層のリピーターを呼び込むことも視野に入ってきます。そのためにはガイドを充実させ、安定的なその体制を築いていくことが望まれます。

特に、どうなん・追分シーニックバイウェイルートには、歴史的価値の高い観光資源が多く存在しています。歴史資源を発信していくために、ガイド役として地域の学芸員との積極的な連携も重要な要素です。歴史資源の発掘や活用では、学芸員が大きな人材資源になります。観光の広域連携の中にガイドの活用とガイド間の連携を組み入れていくと広がりのある魅力が発信できるのではないのでしょうか。近年の観光は「史跡、寺社仏閣などを見る」「スポーツやアウトドアを楽しむ」「芸術・音楽・スポーツの観劇・鑑賞・観戦」など、市場が細分化されており、それぞれの分野で知識が豊富な観光客が少なくありません。そうした人たちの満足度を高める上でも、学芸員に限らず、豊富な知識を持つ地域人材の活用は、一つの鍵といえるでしょう。

また、上ノ国町にある勝山館遺跡の持つアイヌと和人との共生の歴史的な価値はあまり知られていません。勝山館遺跡は夷王山いおうざんのふもとにあります。山裾にはそこに居住していた人々のものと推定される墳墓があり、和人の墓のそばにアイヌの人々の墓が見つかっています。2020年に白老町に完成するアイヌ民族共生象徴空間との連携など、遠隔地との連携によるメッセー



和人とアイヌの人々のお墓について話す上ノ国町観光協会の加藤さん(右端)

ジ性を持った情報発信が期待できます。遠隔地とのつながりや北海道らしいコンテンツを組み入れた連携の視点に目を向けてみることも大切でしょう。

観光では、行政の枠組みを超えた地域間連携が不可欠です。広域的に観光地として発信することで、多様な魅力を発信できるとともに、小さなまちに欠けている機能や要素を他のまちで補完できるという利点があります。また、個で発信する情報よりも複数の主体が発信することで厚みが増し、接する機会を増やすことにもつながります。「北海道ガーデン街道」のように地域の魅力を発信するコンセプトを決めれば、地域ブランドとしての発信力も増し、商品やサービスの付加価値を高めることができます。

地域間で連携すること、広域で連携することが観光産業の発展と成長につながる。このことをそれぞれの地域の人たちが認識することが、互いにウイン・ウインになる関係づくりには重要なことといえるでしょう。

※どうなん・追分シーニックバイウェイルートについては、『開発こうほう』2016年5月号もご参照ください。